

# 高下一郎くんの思い出

上村 忠男

## 1

《池袋駅では西武百貨店が東側にあり、東武百貨店が西側にあるんですね。わたくし、これには面食らいました》

《感激したのは、ニンシ蕎麦です。生のニンシが入っているんですよ。京都では身欠きニンシしか食べたことがなかったものですから》

この高下一郎くんの赴任挨拶に東京外国語大学外国語学部教授会のメンバー一同が爆笑したのは、1980年4月のことであつた。

いまでもよく憶えているが、高下くんの採否をめぐる教授会での投票がおこなわれる日、はたして首尾よく行くのかどうか、わたしは内心冷や冷やものであつた。というのも、高下くんが講師採用候補者になったときの人事は語学科では前例のない完全公募人事であつたが、このこと自体はさして問題ではなかつた。危惧されたのは、高下くんが京大全共闘派の闘士という前歴の持ち主であることだつた。この噂を聞きつけた当時学生課長の田中治男さんなどは、わざわざ京都大学へ事実確認におもむいたほどであつた。

しかし、心配は杞憂におわつた。当日はちょうどスペイン語学科が起こした助手採用人事の審議と投票が先にあり、候補者の高橋正明氏

もかつて東外大全共闘の指導者のひとりであつたということで、大もめにもめた。その反動でか、高下くんのときには質問もなく、あつてなく通ってしまったのだつた。

もっとも、高下くん自身が後日うち明けてくれたところによると、高下くんは学部を卒業するとき法学部の総代に指名されたという。そこで、この機会を運動に利用してやろうということになったのだろう。卒業式当日には壇上で総長を前にして卒業証書を破り棄てるよう、組織から指令がやってきた。ところが、全共闘派の闘士としてはなんとも不面目なことにも、いざ本番になってみると膝ががくがく震えて、抗議行動らしいことはなにもできずにおわってしまったそうである。

ちなみに、田中治男さんと高下くんはその後、わたしを交えて、月に一、二度はいっしょに酒を酌み交わす間柄となつた。高下くんと田中さんはともにヨーロッパ近代政治思想史の研究者であつたのにくわえて、同じ京大卒であつたということで、田中さんは高下くんには特別の親しみを感じておられたのではないかとおもう。

## 2

東京外国語大学に赴任してからの高下くん

は、猫を被ったようにおとなしくしていた。それでも、時としてかつての全共闘派闘士の血が騒ぐことがあったようである。

たとえば、たしか高下くんが東外大に赴任して数年後のことだったとおもうが、民青派の学生たちが中心となって、大学「紛争」の混乱のなかで消滅してしまった学生自治会を再建しようという動きが起きたことがあった。そして、大学当局のがわも、学生たちとのあいだの交渉のための正式の窓口になるものが欲しいということで、この民青派の学生諸君の動きに呼応しようとしたのだったが、これにわたしが教授会の席で異議を唱えたところ、高下くんもさっそく賛同して雄弁を揮ってくれた。《自治会の再建のためには、まずは全学集会を開くことから始めるのではなくてはならないはずである。この自治と民主主義の根幹にかかわる肝腎の手順を民青派の諸君はごまかしてしまおうとしているのではないか》というのが、わたしと高下くんが異議を唱えた理由であった。

また、「日の丸・君が代」問題が小中学校や高等学校だけでなく、大学にまで波及するにいたっていた1999年11月のことである。東外大でも、独立百周年記念式典の折に「日の丸」を掲げるかどうかをめぐって、教授会メンバーのなかには慎重意見や反対意見が数多くあった。わたしも、式の前日には何人かの同僚とともに当時の中嶋嶺雄学長に直談判して、掲揚を抑えるよう申し入れていた。ところが当日、会場の

「北とびあ」に着いてみるとどうだろう。まず入り口には、26語学科の国旗が万国旗のように賑々しくぶら下げられている。そして壇上にも、「日の丸」を先頭に、同じく26語学科の国旗を結わえ付けた棹が一斉に立ち並んでいるではないか。

文部大臣の代理で挨拶にやってきた政務次官が壇上に各国旗が立ち並んでいるのに一瞬とまどいの表情を見せながらも、そのなかから目ざとく「日の丸」の旗を見つけて拝礼する姿に、わたしは思わず吹き出しそうになった。しかし、執行部の姑息なやりくちにやがて憤りが募ってきて、途中で我慢がならず退席してしまった。

一方、高下くんはどうであったかといえば、わたし自身はその現場に居合わせなかったが、直接行動の手段にうって出て、会場の入り口で中嶋学長に詰め寄り、激しい口調で抗議したとのことである。

## 3

教育者としての高下くんはじつに勤勉で、熱血教師ふうのところがあった。教室以外のところでも、新入生歓迎のコンパやボート大会、さらには外語祭での語劇上演や学生たちのクラス旅行などに率先して参加していた。外語祭では、学生たちの運営するイタリア料理店を手伝って呼び込みや皿洗いを引き受けていたほか、

ある時期からは、京大祭での「教官酒場」を模して、「槍亭」（「イタリア」の逆さ言葉）というおでんと日本酒を出す店をみずから開いてもいた。アメリカン・フットボール部の顧問もしていたらしい。

と同時に、一、二年生の成績について毎学年度末に各語学科でおこなうのが恒例になっていた判定会議の場などでは、わたしもども、妥協をゆるさない厳しさを兼ね備えてもいた。そのためもあってか、イタリア語学科では一時期、前期の留年者が三割に達したこともあった。

もっとも、わたしと高下くんとは授業の進め方をめぐってかならずしも方針が一致していたわけではない。たとえば、高下くんは赴任後、それまでわたしの担当していた前期事情講義をわたしに代わって担当してくれたが、その授業の進め方は学生の自主的な発表に重点を置いていたわたしの場合とはおもむきを異にして、入念に準備したノートにもとづく、文字どおり講義調の几帳面なものであった。

それでも、おおむねのところでは、高下くんはわたしのやり方に歩調を合わせてくれた。

まずは、二人が担当していた二年生を対象とするイタリア語講読の授業。この授業をわたしは前期でのイタリア語学習の総仕上げという位置づけにくわえて、学生が後期に進んでから専攻を選択するさいに少しでも役立ちうるものになりたいということで、カルロ・レーヴィの『キリストはエボリで止まってしまった』やト

ンマーゾ・フィオーレの『蟻の民』のような20世紀前半期のイタリア南部農民の生活に題材をとった文学作品、あるいはまた同じく20世紀後半期のイタリアを代表する政治哲学者ノルベルト・ボッビオの『政治と文化』所収の論考など、他の語学科にくらべて相当高度の教材を使っていたが、高下くんもわたしの方針にならって、リソルジメント期のイタリア政治思想にかんするルイーダ・サルヴァトレッリの著作やエドモンド・デ・アミーチスの移民船搭乗記『大洋の上で』、さらにはガエターノ・サルヴェーミニの南部問題論などをあつかってくれていた。

また、従来専修科目では設けられていたが、語学科の授業カリキュラムでは設けられていなかった三年生を対象にした卒論予備演習の時間を、イタリア語学科では特別に新設するようわたしが提案したときにも、高下くんは全面的に賛同してくれた。この予備演習の時間が設けられたことによって、イタリア語学科では卒論執筆者が九割以上にもなった。

#### 4

最後に研究活動であるが、高下くんは京都大学法学部の助手時代、19世紀前半期のイタリアにおいて解放運動の主導権をめぐってジュゼッペ・マッツィーニと熾烈な争いを演じたことで知られる「民主派」の代表的人物、カルロ・

カッターネオ (1801-1869) をあつかった長編力作、「カルロ・カッターネオ研究序説——イタリア民主派の思想と運動」を『法学論叢』(京都大学法学会)の第100巻2号(1976年11月)、同4号(1977年1月)、第101巻6号(1977年9月)、第103巻1号(1978年4月)、同6号(1978年9月)に発表して、学界へのデビューを果たしている。

また、同じ『法学論叢』の第105巻5号および6号(1979年7,9月)には、ヴィンチェンツォ・クオーコ (1770-1823) の『1799年ナポリ革命にかんする史論』についての考察、「ヴィンチェンツォ・クオーコと受動的革命」を発表している。この論考については、わたしも『史学雑誌』第89編第5号(1980年5月)の「1979年の歴史学界——回顧と展望」で取りあげて、所感を述べさせてもらったことがある。

だが、なんといっても特記されるのは、東京外国語大学に赴任してから着手されたヴィットリオ・アルフィエーリ (1749-1803) にかんする一連の翻訳と研究の仕事であろう。アルフィエーリはイタリアにおける政治的リソルジメントの暁鐘を打ち鳴らしたといわれる悲劇詩人であるが、高下くんはこの人物が書いたブルートウスにかんする二篇の悲劇作品(『最初のブルートウス』と『第二のブルートウス』)の口語散文訳をこころみるとともに、それらの作品をとおして表明されたアルフィエーリの政治思想の特質について立ちいった考察をくわ

だてている(「ヴィットリオ・アルフィエーリの悲劇と政治思想 (I) —— 悲劇『最初のブルートウス』考」、東京外国語大学海外事情研究所「研究報告 23」(1985年3月);「ヴィットリオ・アルフィエーリ——最後の悲劇『第二のブルートウス』」、同「研究報告 31」(1986年3月);「ヴィットリオ・アルフィエーリの悲劇と英雄的リソルジメントの思想系譜——第一部」、同「研究報告 46」(1988年3月);第二部は未完)。政治思想史研究者としての高下くんの豊かな可能性がうかがわれる仕事である。

ほかにも高下くんは、イタリアにおける革命とナポレオン体制を生き抜いた「愛国詩人」として知られるウーゴ・フォスコロ (1778-1827) の政治思想についての考察をこころみた論考、「ウーゴ・フォスコロの政治思想——*civilis aequitas* と *lex socialis* の論理」を同じく海外事情研究所の「研究報告 3」に発表している。また、同じく「愛国詩人」の一人であったジュゼッペ・パリーニ (1729-1799) の「詩的マキアヴェリズム」にかんする考察のための資料として、彼の一連の作品の翻訳も手がけている(「研究報告 59, 67, 73」)。さらに、1995年3月に刊行された「研究報告 102」では、ミラノ時代 (1801-1806) のクオーコにかんする研究の一環として、『1799年ナポリ革命にかんする史論』と並び称されるクオーコの書簡体作品、『イタリアにおけるプラトン』の考察をくわだててもいる。

## 5

その高下くんが昨年(2008)の11月21日、忽然と世を去ってしまった。還暦を目前にしての逝去である。

実をいうと、遅かれ早かれこの日がやってくるだろうことはわかっていた。2ヶ月前の9月24日、報せを受けて、わたしは高下くんを調布東山病院に見舞いにおとずれた。そのときの高下くんの姿といたら! すっかり痩せ細って、骨と皮ばかりになってしまっているではないか。あまりの変わりように、一瞬声を失ったほどであった。数日後にお姉さんから電話を頂いたが、癌が進行していてすでに手術も不可能とのことであった。それでも訃報に接したときには、さすがにショックであった。

《退院したら、またお宅にうかがいますよ》

こう別れ際に約束してくれた高下くんであったが、その声にふたたび接する可能性は永遠に絶たれてしまった。いまはただ高下くんの冥福を祈るのみである。とともに、彼の書きためてきた一連の論考をなんとか本にまとめてあげられないものか、と思案しているところである。(2009年2月15日記)